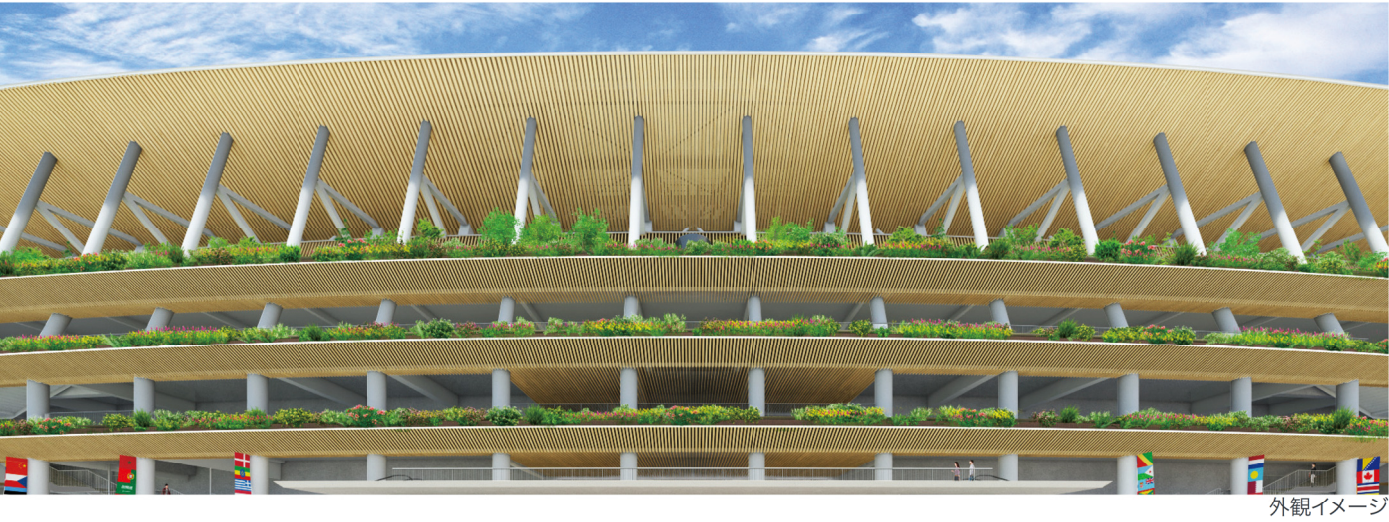


⑧日本らしさに配慮した計画 | 日本の伝統文化を、現代の技術によって、新しい形として表現する方策
日本の気候・風土・伝統を踏まえた木材利用の方策

日本建築の特徴を活かし、気候・風土や景観と調和したスタジアムを創出します

周辺環境を読み解き、先人の知恵を深化させた、日本らしいスタジアムを世界に向けて発信します。



1 連続した軒庇の水平ラインと周辺の緑の深い陰影により、周辺と調和した外観とします

1 外苑の環境と調和し、観客を迎え入れる軒庇

- 日本の伝統的な建築を想起させる、連続する軒庇の水平ラインと深い陰影によって、周辺の木々と調和した、外観とします。
- 屋根の庇や軒庇の見上げ部は全周を連続した縦格子で仕上げます。外壁を「面」ではなく「線」で構成することにより、「和」を想起させる繊細な陰影が周囲の木々に溶け込み、長大な屋根や壁面による圧迫感を軽減させます。



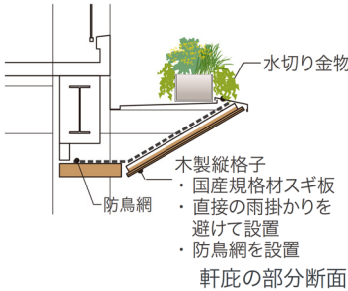
外苑の木々と調和した「杜のスタジアム」

2 「和」を想起させる、縦格子の「繰り返し」のデザイン

- 軒庇の連続した縦格子により、日本建築の要素である垂木を想起させる外観を形成します。水平方向にも高さ方向にも展開した「繰り返し」の構成により、日本らしさをより強調します。
- 木の縦格子には国産のスギの規格材を採用します。設置箇所は軒裏などの雨がかりの少ない部分とし、さらに加圧注入処理(K3仕様)とし、耐久性を高め美観を維持します。



法隆寺五重塔の垂木



3 梁と柱と開口で構成された「日本らしい」外観

- 外周の低層部は水平に伸びる軒庇と鉛直柱の構成とし、軸組によって生まれた、陰影のある印象的な日本らしい外観とします。
- 外周に壁がないことで、日本の気候風土を活かした風通しの良い空間を創出します。彫の深い軒下は、「木漏れ日」のような陰と緑を望める縁側状の空間を創出します。
- 各軒庇上部にはプランターを配置し、日本の野草など四季を感じることが可能な計画とします。



庇と柱の軸組で構成された外観

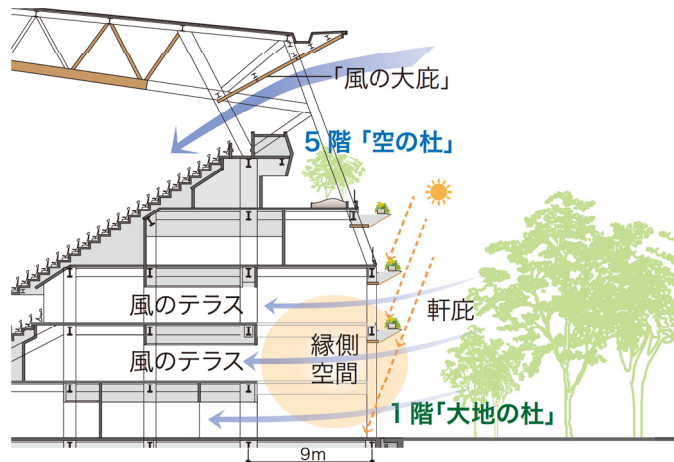


「縁側空間」イメージ

2 「和」の特徴を備えた深い軒庇によって、縁側のような涼しく快適なアプローチ空間を創出します

4 深い軒庇がつくり出す伝統的な「縁側空間」

- 外壁面を約9m後退させることで生まれる軒下の「縁側空間」は、日常時のオープンスペースとして、ランニングコースや雨宿り空間にもなります。さらにイベント時には、観客の入場時の滞留スペースとしても機能します。
- 各層の軒庇が、夏季の日射を遮蔽すると共に、雨の吹込みを抑えます。また、「大地の杜」を通った清らかな風が「縁側空間」を通り抜け、観客席へと導かれます。
- 日本の伝統的な建築要素である「縁側空間」により、内と外がゆるやかにつながる快適な空間を創出します。



「風のテラス」平面

内外を繋ぐ「縁側空間」

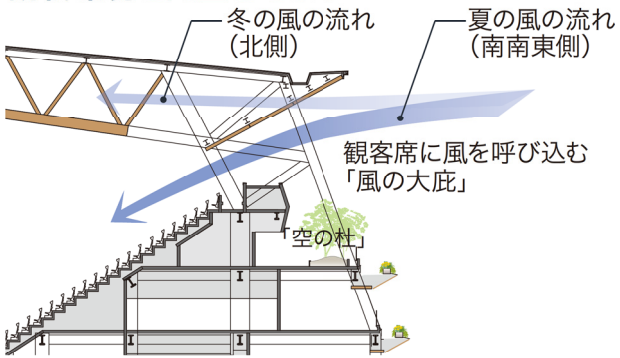


「風のテラス」から「風の庭」を望む

3 季節の風向に合わせた「風の大庇」により、スタンドの観戦環境を向上させます

6 スタンドに風を導く「風の大庇」

- 四季を通して施設周辺の風環境を検証し、3層スタンドに風を導く「風の大庇」を設置することで、スタンドの観戦環境を向上させます。
- 「風の大庇」により、スタンドに導かれた風はスタンド下方へ流れる下降気流となり、観客席に風を呼び込みます。



7 「風の大庇」の格子の幅で風の量を調整

- 日本の伝統的な風の取り入れ方に倣って、風を取り込みます。夏の季節風を取り込むために、「風の大庇」の格子を密にし、風をとらえます。
- 一方、冬季の北風に対しては、格子の間隔を拡げて、風を受け流すようにします。
- 各季節ごとに卓越風に合わせたシミュレーションを検証しながら、格子の間隔を設定します。
- 強風なども想定し、競技をする上で「追い風参考記録」などの影響を及ぼさないように、競技環境に適切な形となるように、格子の間隔を方位ごとに設定します。
- 「風の大庇」の格子は耐候性、防火性、メンテナンス性に配慮してアルミ製とし、焼付塗装とします。

(参考添付資料 P08 参照)

